健康会だより

＜主旨と理念＞
長谷部式健康会は『自分の健康は自分の努力で』をスローガンに健康普及活動をしている会です。健康は人生最高の宝です。世界人類の健康と平和に奉仕しましょう。『体質別』は健康を守る自然の法則です。

発 行 所　長谷部式健康会 総本部
〒491-0905　愛知県一宮市平和1-2-13
発 行 人　長谷部茂人
発行部数　３０００部
tel 0586-46-1258
fax 0586-46-0367
E-メール　hello@hasebe-kenko.com
URL　https://hasebe-kenko.com/

前向き過ぎる“病気”たち

確率！?確立！?…意図ある閾値

当選してみたい夢の宝くじ。年々一等賞の金額が増えて、ついに夏と年末のジャンボ宝くじは、前後賞あわせて10億円という破格値に。買われる方の多くは10枚単位、いや100枚か。おそらく1枚とか3枚だけ買う気にはなれないのでは。多く買えば期待値も上がるというもの。

調べたところ、1等が当たる確立は1000万分の1らしい。（年末ジャンボ宝くじは発行枚数が他のジャンボ宝くじの2倍）　組違い賞の10万円は、10万枚を1組として100組あるので100人。10万円ゲットするにも確立10万分の1でしかない。夢は遠い存在です。

年末年始にかけて猛威をふるうインフルエンザ。この3年は新型コロナに押されたのか押したのか、インフル患者数が激減したかと思うと、今年は新型コロナと競うかたちで罹患者数が伸びている。とは言いつつも、依然新型コロナは毎日20万人とか30万人新患者がいるのに対して、インフル患者は多い日でも数万人、1桁違っている。

不思議なことに救世主であるはずのワクチンも接種後に亡くなってしまう方が後をたたない。インフルワクチンは長年のデータがあり、1千万人に接種してに0.46人、確率でいえば、年末ジャンボ宝くじ1等当選と同じぐらい低い。対して、新型コロナのワクチンは製薬メーカーが発表した数字で見ると、各社およそ100万回接種に平均7人という。日本ではワクチン接種と因果関係を否定できないと認めて、国が保証金を支払ったのはこれまでに10人しかいない。令和3年2月17日から令和4年10月9日までに接種後死亡した1673人は、「因果関係が評価できない」とされて、補償の対象から外されています。仮に、その1673人をその間に接種した3億4千2百万回で割ってみると、1千万回に対して49人が亡くなった計算になります。メーカー発表の数字「100万回接種で7人」が、よほど近いといえます。

インフルワクチン接種は1千万回で0.46人、新型コロナワクチン接種は1千万回接種で49人。どうも1千万ぐらいの単位で「恐怖意識」に差があるように思う。対象者が全数（世界中の人）だからでしょうか？恐れるべきが「外れなし」は、怖いですよね。宝くじは外れても害まではないけれども・・・。

死・・・確立が小さい
&
全数（世界中の人）が対象

1
100万～1000万

近藤誠説の真意

四半世紀前、近藤誠著『患者よ、がんと闘うな』を読んで、こんなこと本に書いて大丈夫なのか？という思いでいましたが、偶然にも直接ご本人に話を聴く機会をえましたので質問してみました。「先生のお話では患者さんが納得されますか？」すると近藤先生は、「治療の名のもとに患者の不利益を行うことの方が罪だ」とお応えになりました。当時先生は「がん治療するなら放射線」と言われていましたが、次第に治療の言葉は少なくなり、やがて表現の極み「がんは放置することが最善の治療」の理念を大にしてゆきました。

医学会から嫌われ、テレビ、マスコミにもたたかれ混迷を極めたか？に思われる著書を出版された。それが、近藤誠著『がん患者よ、近藤誠を疑え』。しかし、訴えかけ続ける「がん放置療法で生き延びた150人の証言」の説得力は、近藤誠流の動かぬ事実が読者を惹きつける。

近藤誠説の問題点を整理してみます。

(主張1)がんは老化現象、自然現象であるから、人為的介入は無理がある。治療で治せるがんは血液がん(白血病)などに限られている。

⇔血液がんが自然現象でないならば、他にも自然現象でないがんがあるのではないか？生涯がんにならない人が多数いるが、その人たちは不自然なのか？むしろそちらを健康というのではないか？

(主張2)がんの多くは休眠がん細胞。早期発見、早期治療で眠っているがんを起こすからがんが暴れだす結果に。乳がんなど周囲に命を脅かす臓器がないがんは、生のクオリティーに影響がない間は検査も治療も必要なし。

⇔すでに暴れだしているがんはどうするのか？眠っているがん細胞と活動しているがん細胞をどうやって見分けるのか？

矛盾か極意か、意見がかみ合っていない感はあるものの、近藤誠氏の主張が奇しくも現代医学の論理矛盾を想起させる点をあげておきます。

(一般論1)がんは細胞に傷がつくことから始まる。

⇔単に怪我しただけの人、やけどした部位ががんになった例は聞いたことがない。休眠がん細胞を起こすな！という主張は、むしろ今のがん治療そのものを疑うべきだ。手術療法(怪我しない部位を怪我させる)、放射線療法(やけどしない部位をやけどさせる)、初期の抗がん剤(生活上起こりえない表皮細胞をただれさせる)、それら強度に細胞に傷をつけているのだから、論法的にいえば、それこそがんをつくることに繋がらないか？

(一般論2)がんは早期発見、早期治療が肝要。

⇔放置(検査しない・治療しない)したがんと治療したがんとの間で生存期間、生のクオリティーに差があるという研究は当然あるが、成果がプラスとマイナス両方ある。予備的治療が拡大治療につながり、生活に支障する例は考えものだ。

映画「猿の惑星」か？、人間の惑星か？

映画では宇宙船が不時着した星では、人間を奴隷にする猿の社会だったという物語。猿が進化、人間は野生化、霊長が逆転しても生態系は成り立つか？

昨年、人類の祖先が間違っている可能性があるという報告がありました。従来の説ではアファレンシスの子孫がアフリカヌス(人類の祖先種)ということになっている。その2つの種が同時期の地層から発見されました。ということは2つの種の、さらにその祖先に共通する別な種がいたことになる。

それで謎が説けた！猿の前足は手の機能もある。親指と他の指が対面していてモノを掴むピンサー・グリップができる。にもかかわらず、歩くときはナックル・ウォークという前足の指を畳み込んで四足で歩く。

共通した先の先祖が「手」を進化させたにもかかわらず、「足」の機能を無くせなかったのはなぜか？それは、「環境」の一言につきる。手であることと足であることの両方を天秤にかけたら、「足」が優先されたのです。樹上生活には、4本の足で体重を支える体型が好都合だった。それで従来の生活方式に戻った！進化した手が退化したと言ってもいい。

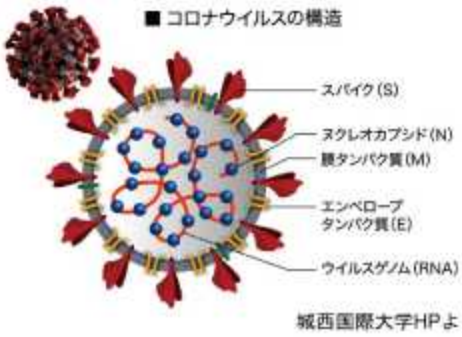
ですから退化を選んだ猿が、進化したヒトを同化するようなことはあり得ない。つまり答えは「猿の惑星」はフィクションです。

人類進化の歴史。数百万年という多くの時間を費やしているために、人間一生に生きる時間ぐらいでは、カラダの変化を見極めることができないということです。

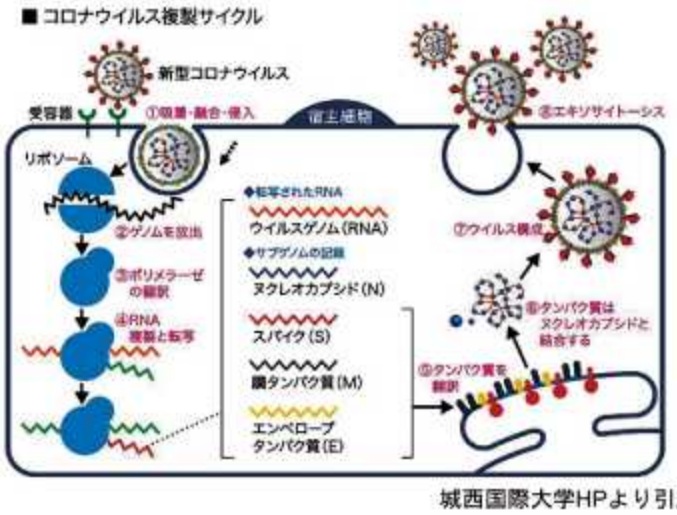
ウイルスに意志はあるか？

2019年暮れに発生した新型コロナウイルスCOVID-19は、全世界6億人以上の患者と600万人以上の死者を出し、現在も流行の最中にある。一体全体、ウイルスの総数はどれだけになるのか？「京」その上の「垓」でもなく、扱ったことがない単位であることに間違いはない。その活動的なウイルスの「意志」について考えてみます。

新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）は図のような、
約100 nm（1mmの1/10000）の球形をしています。



城西国際大学HPより引用

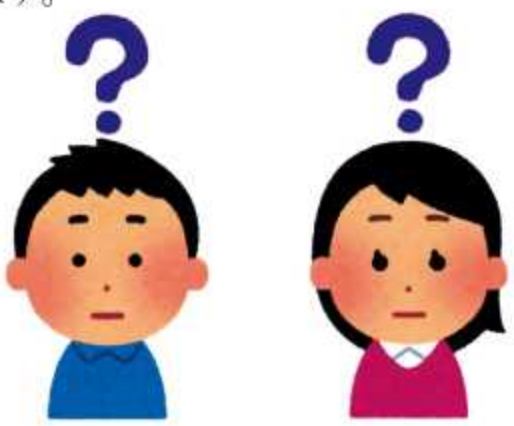


城西国際大学HPより引用

図で示すようにサイズは約100ナノメートル、1ミリメートルの1万分の1。細胞を持たず、メッセージとしての遺伝子があるだけ。自己複製は宿主の細胞まかせ。考えるにも神経細胞や感覚器もない。考える場所が最初からないのだから、「考え」ようもない。

活発に増殖するのは、感染した当人の細胞の中。当人がどんどんウイルスを増殖している。意志があるとすれば、感染者自身と見なすことができるのではないか？

ウイルスを増殖して、それでどうしたいのか？は次の項で考えてみます。



病原菌は続くよどこまでも・・・

中世ヨーロッパで流行を繰り返したペスト。人口の半数が死亡する村があったとか。その恐怖は過去のものではなく、今もアジア諸国で罹患者が絶えない。

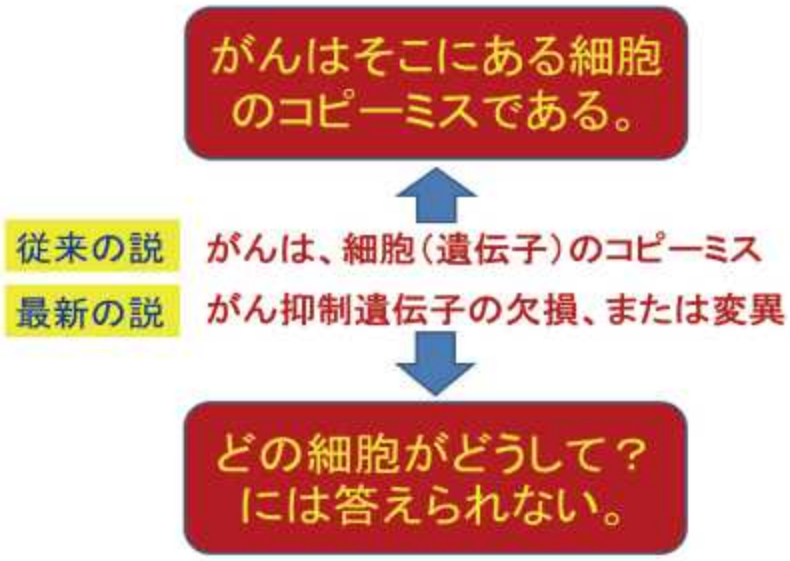
原因は家ネズミの感染から始まるという。人には感染したネズミに寄生したノミを介してうつるのだそうです。

1987-2015年の累積報告数。赤は患者報告数に占める死亡者数の割合。

放置したら3割以上が死んでしまう恐ろしい病気なのに、ネズミがペスト菌によって大量死したという報告がない。ネズミはペスト菌が身体にいることによって、捕食者を遠ざけることができる。ネズミにとってペスト菌はもはや敵でなく、便益を分けあう共生者になっています。これら関係はエイズにおけるミドリザル、SARS（重症急性呼吸器症候群）におけるハクビシンにも同様のことがいえる。その病原菌と人間とでは共益関係が、まだ出来ていないというだけなのです。

がんは細胞のコピーミス？

これまでがんは細胞のコピーミスと考えられてきました。近年では壊れた細胞を修復するがん抑制遺伝子が、欠損、または変異によって修復することが出来なくなって暴走した結果ががんであるといわれるようになりました。しかし冷静に考えると、修復出来なかったならば、「壊れる」ではないですか？がんが出来るでなくて・・・。

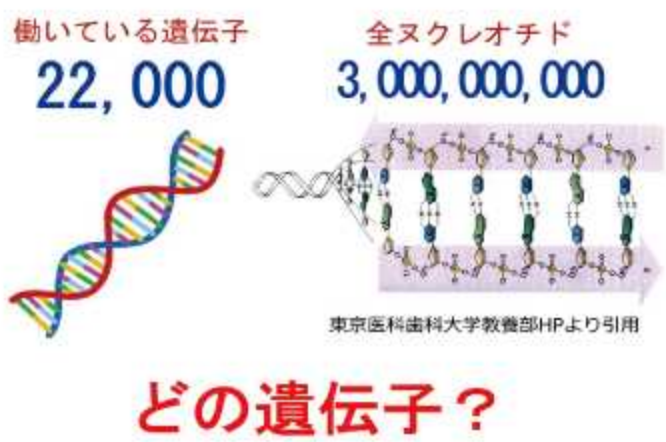


動的平衡・・・負荷と再生の破綻ががん

生物学者の福岡伸一先生は、生命の本質は動的平衡に担保されるといいます。「生物は互いに他を支えつつ、律している。つまり利他的で、相補的だ。絶え間ない物質、エネルギー、情報の交換。それは自らを壊しつつ、創り変えることでなされている。自らを壊すことは、エントロピー増大の法則に対抗するために、生命が進化の出発点で選び取ったたったひとつの方法だった」と語っています。壊れる前に自ら壊しつくり替えるから、壊れないでいれるということですね。

さて、そこで「がん」です。単なる細胞のコピーミスというならば、近藤誠先生のいう老化、自然現象なのだから、全員がんになるはず。ところが現実は老衰で亡くなる方もいる。がん抑制遺伝子の欠損や変異が原因ならば、全身同時にがんになっても良さそうなのにそうでもない。

自ら壊し作りかえる力以上の壊れる力が細胞群に働いたら、どうやって修復する？そうです！身体内部で内発的起きている現象が、遺伝子と関係なく起こっているとは考えられない。



全ヌクレオチド（遺伝子の構成子）30億ある中で、働いている（働きが分かっている）遺伝子は約1.5パーセントにあたる2万2千ほど。役割りが確定している遺伝子は他に流用しても意味がない。だとすると使っていない他のヌクレオチドか？それにしても30億のどれを使う？とどのつまり、ランダムに宛がっても成功するはずもなく失敗ばかりになる。それが、がんではないかと思う。

ウイルスが原因のがん

感染は、日本人のがんの原因の約20％を占めると推計される。B型、C型肝炎ウイルスによる肝がん、ヒトパピローマウイルス（HPV）による子宮頸がん、ヘリコバクター・ピロリ（H. pylori）による胃がんなど。 尚、それらウイルスが何時、どうやってがんをつくるのかは、まだ分かっていない。ネズミに対するペスト菌の例のように、もしかするとウイルスを逆に再利用しようとして複製、増殖した結果ががんだとしたら・・・次の例をみてほしい。

上図は新型コロナウイルスの第1波から第4波までの感染拡大盛んな人、スーパースプレッダーの変移を示したもの、島根県調べ。第1波2人と少数者が拡散していたのが第4波になると72人、陽性者の三分の一にまでになった。ウイルス変異させて皆で広めようとしていると受け取れないこともない。

捕食者から逃れる方法が必然だった動物としての名残りがそうさせているのかもしれない。ヒトが「種」として生き残る術の一つが病気だったと考えられないこともない。

年末ジャンボ宝くじは買いましたか？買い続けると必ず10億円当たります。但し、1千万回。人間の未来も同じです。1千万回失敗したのちは成功が待っている。そのとき病気は無くなっているに違いない。

●申込み・問合せ　〒491-0905 愛知県一宮市平和1-2-13 長谷部式健康会 https://hasebe-kenko.com
TEL 0586-46-1258　FAX 0586-46-0367　E-メール hello@hasebe-kenko.com